岩手県立博物館研究報告　第40号　2023年3月　66～56ページ
Bulletin of the Iwate Prefectural Museum, no.40, pp. 66-56. March, 2023

天台寺「桂泉鐘の銘」を読み解く

四ツ家絵里

はじめに

岩手県二戸市浄法寺町にある天台寺は、古代北奥の仏教文化の中心だった古刹である。古くから、天台寺の本尊は桂泉観音と呼ばれてきた。境内入り口には、その名の由来となった桂の大木と根元に湧いた泉が今でもみられる。

天台寺の桂泉蔵に現存する銅鐘には、元中九年（一三九二）と明暦三年（一六五七）に作られた銘文が刻まれている。前者は「桂泉鐘の銘」と呼ばれた。二つの銘文の日付には二百六十年以上隔たりがあるが、元中九年には鐘に銘を彫ることができなかったため、明暦三年に合わせて鐘に彫ったことが記されている。

なぜ彫れなかったのか、その理由は語られていない。そのため元中九年の銘、つまり「桂泉鐘の銘」は、後世の偽作ではないかと疑われることとなった（1）。

また、「桂泉鐘の銘」の中にある四言詩には意味不明な部分があり、全文はこれまで解釈されずにきた。今回はその四言詩を読み解き、なぜ元中九年に鐘に彫ることができなかったのかを明らかにしたいと思う。

一　銘の全文および概略

鐘の銘は、元中九年の序文・四言詩・奥書と、明暦三年の奥書で構成されている。

全文を天台寺蔵「桂泉鐘の銘」写本（写真1）と岩手県立博物館編『天台寺』から引用し（2）、以下に示す。なお、カッコの表示は便宜上付け加えた。

（元中九年の銘）

〈序文〉

大日本國奥州糠部郡桂泉八葉山天台寺鐘銘並序

當山廼　聖武帝之勅建行基師之権輿也年序遥逮六百五十六載矣爰住侶道尊募諸
縁鋳鉅鐘永鎮山門仍徴銘銘曰

〈四言詩〉

維天之象　則之而然
絶于方隅　鏗乎渾圓
包容群有　震驚大千
慶喜質疑　羅云秉権
寅兮夕兮　扣撃弗愆
欲兮殷兮　教令明宣
佛運浩浩　帝道平平
庶期来刦　永鎮桂泉

〈奥書〉

于時元中九年壬申三月廿六日
幹縁沙門土佐阿闍梨道尊敬誌
長久住持義山叟釋明恩謹撰
大檀那左馬権頭源朝臣守行
大工七郎沙弥

（明暦三年の銘）

〈奥書〉

往昔行基菩薩相霊地於桂泉而奉聖武天皇勅命創建當山挙殿堂門廡之壮列像設鐘

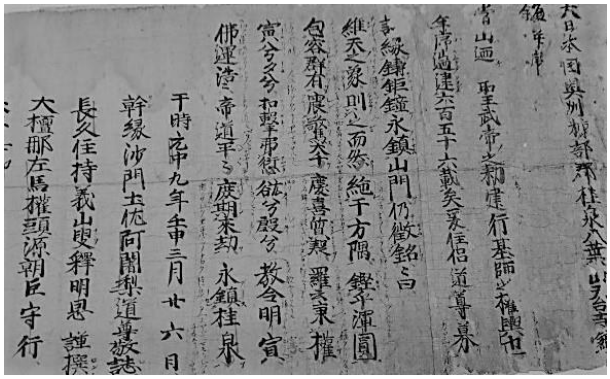

写真1　「桂泉鐘の銘」写本　　天台寺蔵
（二戸市立浄法寺歴史民俗資料館寄託）

鼓之制是故遠近仰信来而無不禱所願者物換時移距六百五十有六載南部十三代太守左馬権頭源守行興修其頽廃阿闍梨道尊募諸檀施鋳鉅鐘求銘於義山明恩禅師為鎮山門雖然不能彫之同幹縁疏軸之以蔵宝殿相傳矣今及二百六十六年廿八代太守重直継曩祖之志亦復再興之次以旧銘彫其鐘将傳不朽且冀永嗣如願遐福無彊家國有慶

明暦三年丁酉冬十二月十日　中峰十二世孫規伯叟無方　識

四言詩を除いた内容は、以下のように要約できる。

行基が霊地と見た地に、聖武天皇の勅命によって建立されたのが天台寺である。広壮な殿堂や門が並び仏像も列をなし信者も方々から大勢やってきた。その後六百五十六年が経って、南部家十三代守行が頽廃を再興し、住職の道尊が諸縁を募って鐘を鋳造し、義山明恩が銘を作った。そのときは銘を鐘に彫ることができず、南部家で代々その銘を秘蔵し、二百六十六年後の二十八代重直のとき、先祖の志を継いでやっと鐘に銘を彫ることができた。

二　銘に登場する主な人物について

銘に関わった主な五人を登場順に見ていく。

・土佐阿闍梨道尊（不詳～不詳、但し一三九二年以降）

土佐道尊は天台寺第三十七代住職だが経歴は不詳である。小笠原伊八氏によると（3）、

（前略）五攝家の一である一條土佐守藤原経隆の第九子であって、家を春日又は土佐と號したものであった。幼にして大覚寺に於て得度して、仁和寺の僧正禅助に従身し、隠岐對馬に渡り、（後略）

とあるが、その根拠とした出典は記載されていない。

他に『桂泉天台寺縁起』の「御輿廻ノ由来」の章には、次のようにある（4）。

（前略）足利氏跋扈シテ南朝ヲ虐グル甚シケレバ茲ニ長慶帝陛下宸襟ヲ悩マサレ（中略）伊達家ニ救助ヲ頼ミタレバ（中略）足利氏ニテハ伊達方面ニ御遁レアラントテ厳重ニ捜索セラン、仍テ伊達家ニテハ皇帝ノ安穏ヲ図リ南部家ト相談シテ其地ニ避難サセ申サントスレバ南部家ニテ良策ヲ講ジ、天台寺住職道尊ヲ招キ袈裟ヲ脱シ、法衣ヲ子息白雲ニ譲リ侍従官トナス。仙台、塩釜ニ行キ陛下ヲ海上宮古ニ遷シ奉レト命ゼリ。（後略）

このあとの続きを要約すると、道尊は長慶天皇を岩手県宮古市の黒森山に遷し二年以上隠れ住んだが、また足利氏に察知され八戸方面へ向かった。その途中、長慶が体調を崩したため青森県名久井の長谷寺（現・恵光院）で療養、その後天台寺近くの山田の盆地に移った。その地で長慶は病死し、遺体を天台寺に運んで埋めたことが記されている（5）。

また、道尊は岩手県大船渡市に伝わる『三上氏系譜』を編纂している。『三上氏系譜』はいくつかの写本が現存するが、ここでは全文が残る二升石三上甚之丞所蔵の写本を用いた、佐々木京一著『「三上氏系譜」太平記から明治まで』の記述を参照した（6）。『三上氏系譜』によると、三上氏の初代は出雲出身で、隠岐の島に流された後醍醐天皇の監守を勤めるも後醍醐の隠岐脱出に加担し、以後三代にわたり南朝天皇に侍従している。三代・元綱は長慶天皇に仕え、後述する義山明恩とともに奥州に下向し岩手に移り住んだ。元綱が道尊に依頼し、初代から三代までの事蹟を編纂させたとある。

その他、後に触れるが元中八年（一三九一）五月に鐘を鋳るための寄付を募った「幹縁疏」の写本（写真4）が天台寺に伝えられ、元中九年七月には太鼓修理を願主として行ったことが、天台寺に現存する太鼓胴内に墨書きされている（7）。

・義山叟釈明恩（一三二三～不詳、但し一三九二年以降）

明恩は、南朝方の高僧、孤峰覚明の高弟だった。『群書解題』第四巻下の「孤峰和尚行實」の解説によると（8）、師の孤峰は、南朝初代後醍醐天皇からは国済国師の

号を、二代後村上天皇からは三光国師の号を贈られている。また、「孤峰和尚行實」の内容の他に、孤峰の主な弟子十二名が挙げられ九番目に義山の名がある。

他にも『正法山六祖伝』によると（9）、

十五歳依本州天忠寺義山和尚而薙髪義山乃雲樹三光国師高弟也

とあり、京都の龍安寺を開山した義天玄詔の得度に立ち会ったことがわかる。

「桂泉鐘の銘」の奥書にみえる「叟」とは、おきな、老人の意で、このときかぞえで七十歳。道尊より年上だったのだろう。「釈」は釈迦の弟子の意。「長久住持」とは、岩手県久慈市の長久寺（廃寺）の住職だったことをいう。

また、岩手県盛岡市・聖寿寺の『大光山聖壽萬年禅寺縁起』には（10）、「聖壽二世 犇（前）天忠義山明恩和尚禅師（脇屋義治）」の文字がみえる。脇屋義治とは南朝方の武将新田義貞の甥にあたる。『太平記』巻第十四では、十三歳の義治が敵方に取り残されるも冷静に状況を読み、敵に気付かれず味方の陣に戻った勇敢な少年として描かれている。義治はその後も武将として活躍し上野・越前・美濃・信濃・伊予・土佐・阿波・出羽などで転戦を繰り返した。

また、義山は、『三上氏系譜』の三代・元綱の章にも登場する（11）。

（前略）文中二年（中略）八月天皇位ヲ皇太弟ニ伝ヘ玉川宮ニ徙ル（中略）右馬介三上元綱（中略）釈明恩（中略）等従フ（後略）

（前略）元綱建徳文中ノ間長慶天皇ニ玉川宮ニ仕ヒ下テ夷域ノ中ニ入リ元中年中南部守行ニ従テ秋田役ニ従事シ、釈義山阿闍梨道尊ト友トシ善シ、常ニ玉川宮ノ冥福ヲ祈ル（後略）

義山は長慶天皇に従って三上元綱とともに東北へ下向し、長慶崩御後は道尊らと冥福を祈ったとある。

なお、『三上氏系譜』は、題言によると天正十九年（一五九一）九戸政実の乱の戦火で散佚し、寛永十六年（一六三九）に作り直し、慶応二年（一八六六）に改写するも誤謬が多く、明治三十二年（一八九九）に書き直したとある。

明治三十二年頃は長慶天皇の譲位を文中二年（一三七三）とする説が有力だったが、後に譲位は弘和三年（一三八三）頃と判明したため、記述に十年のずれがあることを考慮しなければならない。また、再三書き直されたことも留意を要するが、南朝三代天皇に仕えた事蹟が『三上氏系譜』の核心であるため、それらは詳細に伝えられてきたものと思われる。

・源朝臣守行＝南部守行（一三五九頃～一四三七）南部家十三代当主

南部氏の一族には、八戸（根城）南部氏と三戸南部氏などがあるが、守行の三戸南部氏が台頭する。南部氏一族は元々南朝方だった。八戸南部氏は南北朝時代一貫して南朝に尽くしたが、三戸南部氏は途中から北朝方についたとか、変わらず南朝方だったなど双方の説がある。これは天文八年（一五三九）に家中の内紛により古文書や資料を焼失し立場が不明となってしまったことに起因する。そのため昭和初期に郷土史研究家によって、南朝方、北朝方のどちらだったのか活発な論争が行われたが、第二次世界大戦によって立ち消えとなり、決着しないまま現在にいたっている（12）。

守行は、南北朝時代終焉後、足利将軍に従うことを拒んだ八戸南部家を説得し、また、幕府直属の京都御扶持衆に任命されるなど、北朝方かのような動きがみられるのだが、「桂泉鐘の銘」には南朝の元号を使用している。

・廿八代太守重直＝南部重直（一六〇六～一六六四）南部家二十八代当主

重直のころ、南部家は金の産出のおかげで潤沢な資金を蓄えていた。そこへ対馬から有能な外交僧が南部藩預かりとなってやってきた。それが次に述べる規伯無方で、規伯の協力を得て、明暦三年に南部家の念願だった「桂泉鐘の銘」を鐘に彫ることができた。

・規伯叟無方（一五八八～一六六一）

規伯無方は、対馬藩で朝鮮通交の外交事務を行っていた外交僧だった。

しかし、対馬藩内のお家騒動が絡み、朝鮮への文書の偽造を密告され、盛岡に配流されることとなった。流罪の身とはいえ、その博学さから南部重直の信頼を得て重用された。盛岡滞在中、造園、酒造、製薬等、様々な文化をもたらして方長老と呼ばれ慕われた。

「中峰十二世孫」の中峰とは、中峰明本（一二六三～一三二三）という元代中国の僧で、日本の僧侶は中峰に教えを乞うため中国へ渡っている。義山明恩の師、孤峰覚明もそのひとりで、中峰から直に教えを受けた。偶然ながら規伯無方と義山明恩は同じ教えの流れを汲んでいた。

規伯も「叟」を用いているが、当時の義山と同じくかぞえで七十歳だった。

三　四言詩について

四言詩には、鐘の音の雄大さを称え、世の中と天台寺が永遠に守られるようにとの祈りが綴られている。部分ごとに読み進め、解釈が困難な点をあげてゆく。

詩の前半は鐘の音を称賛している。鐘は天を象ったものであり、鐘の音は四方隅々に響き渡りあらゆるものを包み込む寛大さと、ときには震え上がらせるほどの威厳を放ったとある。

中盤の「慶喜質疑」「羅云秉権」が、最も理解に苦しむ部分となっている。ここは前後とのつながりがなく、突然、人名と思われる語句が出てくる。「慶喜は疑を質し」「羅云（らうん）は権を秉る」と読めるが、誰が何をしたというのだろう。

まず人名を推定したい。『大蔵経全解説大辞典』二百九十九頁の「金剛光焔止風雨陀羅尼経」に、「慶喜（阿難）」という表記があり「慶喜」は釈迦の十大弟子「阿難」の別名と推定される。「阿難」はよく使われる名称だが、なぜ知名度の低い「慶喜」にしたのだろうか。韻を踏むところではないため音韻とは関係ない。そうなると表記に意味があると考えるべきであろう。そして「疑を質し」たとは、何を表したことだろうか。

次に「羅云」だが、慶喜と同様に釈迦の十大弟子で、釈迦の唯一の実の息子「羅睺羅（らごら）」の別名である。釈迦の実子として周囲からいつも厳しい目で見られたことで戒律を厳守するようになり、密行第一と称せられる人物となった。「羅睺羅」と表記せず「羅云」としたのは、四言詩という限られた字数のため二文字を選んだものと思う。また、「秉権」とは「権を握る」という意味で、密行第一と称せられた人物にはふさわしくない。何を示唆した表現なのだろうか。

後半は、朝夕怠らず鐘を打ち、大きく響き渡る鐘の音によって世の中が永遠に平和であるように、そして桂泉天台寺も永久に守られますようにとの祈りで終わる。

最後の「永鎮桂泉」の「永鎮」という表現も気になった。序文にも「永鎮山門」とある。「鎮」という字は「鎮護国家」という熟語で銘に用いられるのが一般的だが、どうもそれとはニュアンスが違っているように感じる。「永く鎮める」とは何を表現しているのか。

ここまで挙げてきた解釈困難な点を考えるにあたって、他の史料や伝説をみてゆく。

四　「奥南旧指録」に登場する桂泉鐘の銘

南部家歴代当主の事蹟を代ごとに記した『奥南旧指録』という古文書がある(13)。近世に作られたもので南北朝時代からかなりの年数を経て成立していることは考慮すべきだが、南部家で言い伝えられてきたこととして参考にしたい。

写真2は、岩手県立図書館所蔵『奥南旧指録』写本「十三代守行公御代之事」の章の終わりの部分である。はじめの二行を抜き出すと、

守行公左馬権頭事於吉野帝見而桂泉鐘の銘三光法弟子長久寺義山明恩禅筆跡今に残れり

とみえる。

南部守行が「桂泉鐘の銘」を吉野（奈良）で帝に見せたことが記されている。つまり南朝天皇を訪ねている。このときの帝は長慶の弟・後亀山天皇だった。先にも触れたように、守行には北朝方のような動きもみられるが、ここでは明らかに南朝

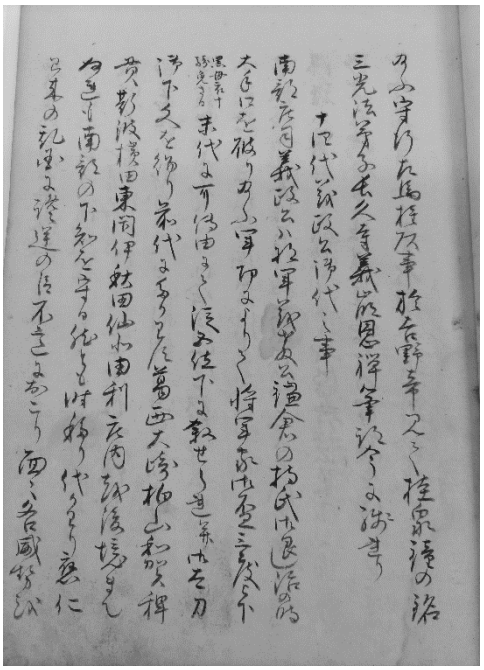

写真２　『奥南旧指録』写本
岩手県立図書館蔵

方として行動している。当時、日本各地では南朝対北朝の戦が勃発し、足利氏は南朝方壊滅のため徹底的な取り締まりを行っていた。そのさなかでの守行のこの行動の意味を推測すると、危険を冒してでも伝えなければならない重要なことが「桂泉鐘の銘」に書かれていた、ということになろう。

三戸南部氏の態度は、当時の武家たちにみられた日和見主義に倣ったに過ぎないのではないだろうか。また、北朝方だとみせかけかけることで、かえって裏で南朝の支援がしやすくなったことも推測できる。

五　天台寺の長慶天皇伝説

天台寺の長慶天皇についての寺伝は第二章で『桂泉天台寺縁起』を引用したが、その続きには長慶の遺体を埋めた場所の詳細がある（14）。

（前略）足利幕府ヲ憚リ公然御葬送モ成リ難ク、然レ共一天萬乗ノ尊體ナレバ其儘ニシ奉ル事能ハズ。（中略）道尊先導シ夜中秘密ニ桂泉天台寺境内毘沙門堂ノ背後ナル丘上ニ土ヲ深ク掘リ看経シテ埋メ参ラス。其上ニ木炭ヲ散布シ（中略）其上ニハ土ヲカケ墓印トシテ杉木ヲ植ヘ置キタリ。其処ノ周囲ニハ川石ヲ布列ス。（後略）

ちなみに、平成七年（一九九五）に当時住職だった瀬戸内寂聴さんらによって、この伝承の場所に墓が整備された。

現在、天台寺では春と秋に例大祭が開催され、神輿渡御が行われている。

天台寺の神輿渡御は一風変わっていて、一般的な威勢のいい賑やかなものではない。神輿の担ぎ手が三角の白い布をひたいに着け、無言で本堂を三回廻るという、静かで厳かな儀式が執り行われる（写真３）。『桂泉天台寺縁起』によると、長慶天皇崩御の事実を足利氏側に知られぬよう、葬儀を祭りに擬して行ったことに由来すると伝えられている。

写真３　天台寺例大祭　御輿渡御の様子
（２０２２年１０月４日開催　天台寺 HP より）

六　四言詩を読み直す

それでは、三章で挙げた四言詩の解釈困難箇所について、これまでみてきた天台寺の伝承や『三上氏系譜』の記述、そして南部守行が吉野まで後亀山天皇に「桂泉鐘の銘」を見せに行ったことなどを考慮して読み解き、その背景を推測したい。

まず、どうして阿難ではなく「慶喜」としたのか。それは「慶」の字を使い、長慶天皇の「慶」を示すためと考えることができる。

次に「羅云」だが、先述したとおり、釈迦の唯一の実子・羅睺羅であることから、

血のつながりの象徴として用いたのだろう。正統な天子の血を継ぐのは南朝の長慶天皇であり、足利氏のかかげる北朝天皇は正統にあらずとの意を「羅云」の名を用いて示していると思われる。

「永鎮桂泉」については、「鎮」の字には「埋める」という意味もあるので、長慶が桂泉に眠っていることを暗示しているように思われる。「永鎮」を繰り返し使用し、長慶の永眠を強調させたのではないか。

次に四言詩に使用された漢字に注目すると、音読みがケイとなる字、「慶」が一回、「兮」が四回、「桂」が一回の全六回あり、意図的にケイの音を繰り返しているのではないか。

さらに、明暦三年の銘の奥書は「家國有慶」で終わる。これは銘を書いた規伯無方があえて「慶」の字を用いて、「長慶天皇ここに有り」と語気を強め、結びとした意図があったのではないだろうか。

以上をもって四言詩は、長慶を謳ったものと考えたい。決して公然と表現できないが、暗示する文言をちりばめ、四言詩を二通りに読めるように義山明恩は作詩したのだろう。後世に残そうとした四言詩の真意は次のようなものではなかっただろうか。補足を加えて解釈した。

この鐘は、天子・長慶天皇を象ったものだ。これが真相である。
四方隅々のあらゆるところへ行き渡り、幾重にも丸い波紋を次々と拡げていくような鐘の音を打ったがごとく、
万物を包み込み、全世界を震い驚かせるような、偉大な方であった。
長慶天皇は、偽造の朝廷・北朝と武家政権に異を唱え、
羅云が釈迦の血を継いでいたように、天子の正統な血を受け継いだ真の天皇であった。
朝夕絶えることなく鐘を打ち響かせ、国家のありかたが正しいか問いかける。
欿々（こうこう・大きな音の形容）と、殷々（いんいん・響く音の轟きの形容）と、大きく響き渡る鐘の音は、あるときは忿怒の形相で導き示した長慶天皇のようだ。
仏法が行き渡り、王法が平和に平穏に続いていく、
そんな日が来て、永遠に続きますように。長慶天皇がここ桂泉天台寺で安らかに眠られますように。

七　「桂泉鐘の銘」を鐘に彫れなかった理由

先掲『奥南旧指録』によると、南部守行は南朝の後亀山天皇に謁見したとあったが、それは長慶の崩御を報告するためで、また、長慶の事蹟を永遠に残すため「桂泉鐘の銘」を鐘に刻むことを申し出たのだろう。しかし、後亀山は守行に忠告したのではないか。

「今、この銘を人目にさらしてはならない。長慶の死は決して他人に知られるな」

そのため「桂泉鐘の銘」は、しばらくの間、南部家の秘蔵とせざるを得なかったのではないだろうか。また、新田氏や楠氏といった南朝方の有力武将は、足利将軍から迫害をうけていたこともあり、南部守行の南朝方の動きが知れることも懸念されたことだろう。「桂泉鐘の銘」は、こうして世に出るタイミングを待ち続けることになったと思われる。

それから約百七十年後、足利将軍の権威が衰退の一途をたどっていた永禄二年（一五五九）に、楠氏の後裔と自称する大饗正虎が、正親町天皇から朝敵赦免の綸旨を得て楠の名前を復活させるという出来事があった。さらには、徳川家康が自分の出自を南朝方の有力武将新田義貞に連なる新田源氏だと公言し、加賀藩主前田綱紀は萬治三年（一六六〇）に「楠公父子訣別図」を狩野探幽に描かせるなど、南朝贔屓の風潮が広まっていた。そのため明暦三年（一六五七）頃には、「桂泉鐘の銘」を表に出せる状況となっていた。そこへ規伯無方が配流されてきたことで知恵を得られ、南部家の念願だった「桂泉鐘の銘」をついに鐘に彫ることができた。しかしながら悲願が達成されると、代々伝えられてきた「桂泉鐘の銘」の意図を継承する必要がなくなり、皮肉にも銘の内容の真相が次第に忘れ去られることとなった。それが後に偽造説を生むことにつながったのだろう。

八　「桂泉鐘の銘」の歴史的意義

「桂泉鐘の銘」を前述の通り読み解くと、これまでの通説と異なる見方ができる。それらを考察してみたい。

・長慶天皇の命日について

後亀山天皇は、守行の謁見から六カ月後、南北朝合一を受け入れた。これは、「桂泉鐘の銘」の長慶崩御の報せが後亀山にそう決断させたのではないだろうか。

通説では長慶の死去を南北朝合一から二年後の応永元年（一三九四）としている。その根拠とされるのが、『大乗院日記』目録一の記述である（15）。

八月一日、大覚寺法皇崩、五十二、号長慶院、

しかし、天台寺には元中八年（一三九一）五月付道尊筆「幹縁疏」写本（写真４）があるので、そのとき道尊は長慶の侍従の役割を終えて天台寺に戻っていたものと思われる。つまり、長慶はすでに亡くなっていたと考えられる。

また、浄法寺町には天台寺の由来や縁起を記した複数の文書が伝わっているが、長慶の葬儀といわれる神輿渡御の記述を比較してみたい。

昭和十一年（一九三六）に書かれた『桂泉天台寺縁起』によると（16）、

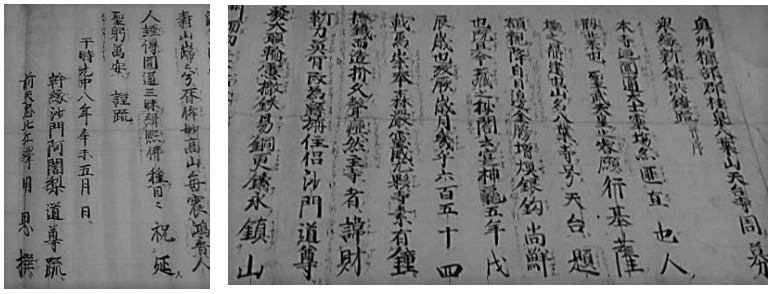

写真４　「幹縁疏」写本　冒頭部分（右）と末尾部分（左）

天台寺蔵　（二戸市立浄法寺歴史民俗資料館寄託）

祭礼ノ日時

（前略）四月十八日ハ本年農作物ノ豊熟ヲ神ニ懸ケテ祈リ、神輿本堂ヲ三周シ諸信者ノ祈禱ヲ受ケラル。（後略）九月二十九日ハ農業農作ノ御礼トシテ四月十八講ノ式ノ如ク九日講トス。三十七代道尊ノ命令ヲ守リ長慶帝陛下ノ御葬式トシテ秘密ニ神輿ヲ巡廻スル事十八講ノ如シ。（後略）

御輿廻ノ由来

（前略）九月二十九日ハ命日ニシテ年々御輿本堂ヲ三回廻ルハ本送葬ヲスル為ナラン。（後略）

とあり、神輿渡御は四月と九月の二回行われている。また、九月二十九日を長慶の葬式および命日としている。

それ以前のものをみると、大正元年（一九一二）に書かれた『桂泉観音史蹟考』の「維新前ノ祭典」の章には（17）、

（前略）四月十八日桂泉ノ祭事ハ同山月山ノ祭典ニシテ神輿ノ渡御式アリ其行列タルヤ先山中警固ノ役アリ（中略）観音堂ヨリ出御シ左ニ廻ルコト三廻即チ御堂ヲ三周シテ還座スルヲ例トス（後略）

とあり、九月については記載がない。他に大正四年（一九一五）のものと推定される『桂泉観音記』では「祭事祈禱例祭」の章に（18）、

（前略）四月十八日御輿渡御アリ其式タルヤ山中警衛ノ役人布染ノ背ニ丸ノ内ニ桂ノ字一字染現シタル裏割ノ長羽織ヲ着ス両刀ヲ帯シ六尺ノ棒ヲ杖ツキ二人先導ス之ヲ警固ト云フ次ニ貝吹二人（中略）御堂ヲ三周シテ還座シ此一行堂ノ背後巨桂ノ前ニ達スレバ必ズ礼拝スルヲ恒例トス（中略）
九月九日ニハ三光院登山祈禱ヲナシタリ
仝（同）月二十九日ハ三光院餅及赤飯ヲ供ヘ祈禱シ来レリ
十月十七日ハ（後略）

と、四月十八日の神輿渡御の装束や役の詳細が語られ、格式高い祭事の様子がわかるが、その一方、九月二十九日はたった一行のみで、神輿渡御については記述がない。続いて、大正七年（一九一八）編『桂清水案内記』には次のようにある（19）。

五、四月の祭禮

四月十五日より登山し夏花と稱へ七月十五日まで百日間花を供す。十八日は月山祭と稱し又十八日講といふ。此日三光院配下の衆坊と合し御輿の渡御あり。観音堂より出御して堂を三巡し還御す。此の渡御を禮拝せんと遠方のものは前日より登山し各衆坊中に宿泊するもの少からざりき。

六、六月の例祭

（前略）九月初九日二十九日登山祈禱すと雖も参拝者多からず。

四月十五日から百日間も花を供え、四月十八日に神輿渡御が行われていた。九月二十九日は神輿渡御がなく、しかも六月の章にまとめて書かれていて、四月ほど重要視されていないことがわかる。

このように、神輿渡御は、大正時代前半には四月十八日のみに行われ、昭和十一年には四月に加え九月二十九日にも行われている。しかも九月のほうを長慶の葬儀と伝えている。この変容の理由は、大正七年編『桂清水案内記』の緒言から推測できる。緒言を要約すると「修築工事第一期を終え今秋（大正七年）九月に落成式を挙行予定で、登山者が激増すると思われることから案内記を編纂した」といったことが書かれている（20）。おそらく落成式の日取りは縁日の九月二十九日が選ばれ、その際、四月のみだった神輿渡御を特別に行い、それ以降、春と秋二回の例大祭が行われるようになり、また、落成式を盛大に行ったことで九月が命日だと誤解したのではないだろうか。

さらに、明治から大正、昭和初期は、住職が不始末を起こし罷免されることが続き、住職不在の時期が長くあったこと、それ以降は他の寺からの兼務住職となったことで、混乱が生じていた時期でもあった。『桂泉天台寺縁起』の序文には、「由来案内縁起ナキヤ」とあるので、作者は『桂清水案内記』などの存在を知る機会がなかったものと思われる。

よって、長慶の葬儀は九月二十九日ではなく四月十八日だったはずだ。そうすると、実際に亡くなったのは四月十八日以前のそう遠くはない日と想定される。思い当たるのが「桂泉鐘の銘」の日付、三月二十六日だ。この日が命日だったのではないだろうか。元中八年三月二十六日に亡くなり、天台寺の縁日の四月十八日に葬儀として御輿渡御が行われ、四十九日忌を終えた五月に道尊らが行動を始め、まず道尊が「幹縁疏」を作成した。義山明恩は「桂泉鐘の銘」を作成し、一周忌にあたる元中九年三月二十六日に「桂泉鐘の銘」を南部守行が吉野へ持参したというのが一連の流れだったのではないだろうか。推測だが、死去後一年間は決して他言するなという長慶天皇の遺言があったのではないか。そのため吉野への報告を一周忌に行ったのではないだろうか。

浄法寺町以外の史料でも元中八年死去を思わせるものがある。福岡県八女市に伝わる『五條家文書』の「良成親王自筆御書状」の一文を引用する（21）。

（前略）仙洞幷李部大王之御在所等、殊承度候、（後略）

これは、九州の征西将軍宮が、所在不明となった仙洞と李部大王の消息を尋ねたもので、仙洞とは太上天皇の別称で長慶を指している。書状に日付はないが、村田正志氏は元中八年十月ころの書状と推定している（22）。元中八年十月ころは、おそらく道尊らが必死に長慶崩御の事実を隠していた時期で、南朝の征西将軍宮にも知らせなかったのであろう。

長慶の死去によって後亀山は南北朝合一を受け入れる決心をしたと考えているが、南朝の不利にならぬようその事実は極秘とされ、南朝内でもごく一部の者しか知らされていなかったのではないか。南北朝合一の二年後、長慶が崩御したとの噂を南朝側から流したことで『大乗院日記』に記録され、思惑通り、実際の死去日を隠蔽することができたのではないだろうか。

・長慶の御陵について

長慶の墓といわれるものは全国各地にある。それは影武者を各方面へ放ち、彼らが拠点を移す度に見せかけの墓を作ったことによる。そのため長慶の御陵は特定されていなかったが、昭和十九年（一九四四）、当時の宮内省によって長慶天皇陵は京都嵯峨の慶寿院址と決められた。慶寿院とは長慶の子息・海門承朝が父の菩提供養のため創建したといわれている天龍寺の塔頭だった。その決定を下した陵墓調査委員会の議事録によると、長慶の遺骸がそこにはないことを承知の上、政治的判断によって決められたいきさつが残されている（23）。

天台寺にも前述した通り、長慶の遺体を埋めた詳細な場所の伝承があるが、境内の他の場所も墓ではないかと言われていたことがある。天台寺には別当「桂寿院」が、創建のころから明治十五年（一八八二）に火事で失われるまで存在したが、その桂寿院跡近くに「土踏まずの丘」と呼ばれる神聖な一画がある。文字通り足を踏み入れることを禁じられた場所で、かつては清掃、除草を怠らず、手の届かないところは腹ばいとなり草を取り除き、決して丘の上を踏ませなかったという。大正五年（一九一六）に発掘調査が行われ経塚と判明し、「土踏まずの丘」は墓ではなかったことが明らかとなった。

推測にすぎないが「土踏まずの丘」は、本当の墓が暴かれないように道尊が仕組んだものではないだろうか。天台寺は一つの山全体が境内で御山と呼ばれており、瀬戸内寂聴さんが整備した長慶の墓は御山の頂上付近にある。一方、「土踏まずの丘」は御山のふもとに位置し、いかにも畏れ多い場所として扱うことで、御山頂上の墓に目が向けられないようにしていたのでないだろうか。やはり長慶の墓は山のてっぺんにあるほうが相応しいように思う。

また、長慶の子息・海門承朝が建てた「慶寿院」については先述したが、「慶寿院」は長慶の別称ともなっている。この名は、天台寺の別当「桂寿院」と同じく「ケイジュイン」である。この一致は単なる偶然であろうか。海門承朝は天台寺の桂寿院のことを聞いていたのではないか。そのため同じ音の「ケイジュイン＝慶寿院」と命名し、遠く京都から、天台寺にある父の墓を守ったのではないだろうか。

ここまで「桂泉鐘の銘」の解釈から見えてくることをあげてみた。「桂泉鐘の銘」は偽物との疑いをかけられ解明されてこなかったが、丁寧に読み解くと時代背景に符合し、日本史上においても重要な内容を含んでいると考えられる。南部家が秘蔵し代々伝えてきた「桂泉鐘の銘」は、当時は公表できなかった歴史の裏の真実を伝える貴重な証しなのではないだろうか。

おわりに

通説では、長慶天皇の性格は傲慢で冷酷だったとされる。さらには、主戦派で和平派の弟・後亀山と対立し、和平派に敗れたことから後亀山に譲位したという。

しかし、その通説を長慶の行動と照らし合わせると、矛盾がみられる。長慶の侍従たちは殉死していない。それは長慶が殉死を認めなかったからだろう。死の間際に、四言詩に謳っているような忿怒の形相で「絶対にあの世にはついてくるな」と言い放ったのではないだろうか。果たして長慶は傲慢で冷酷な人物だったのだろうか。

また、長慶は譲位後、高野山に直筆の願文を納めている（24）。

敬白
発願事
右今度之雌雄如思者殊可致報賽之誠之状如件
元中二季九月十日太上天皇寛成

「今度の勝負が思い通りになったら、ことに心をこめてお礼参りいたします」と、長慶は譲位後の称号「太上天皇」と諱の寛成で署名をしている。これを長慶と後亀山、主戦派対和平派の争いの勝利を願ったものとする説もあるが、もしも和平派に敗れての譲位ならば、屈辱的な太上天皇の称号で願文を書かないだろう。

長慶と後亀山は、本当に対立していたのだろうか。二人の不仲説を探してもそれを示す具体的なエピソードは残っていない。昔からそう伝わるというあいまいな文

言が見られるのみで、むしろ、兄弟で協力して南朝復興に尽力していたとも考えられる。

長慶と後亀山の対立という通説が生まれた理由は、江戸時代の「太平記読み」による、庶民向けに脚色された物語であろう。太平記読みによって南朝贔屓の気風がつくられていったが(25)、その中で『太平記』に載っていない南北朝時代後期の話が創作され、その創作話によるものを通説としてきたのではないだろうか。長慶の人物像や後亀山との関係については、今後も検討を要すると思われる。

以上、「桂泉鐘の銘」の四言詩の解釈や寺伝を通して、従来の通説と異なる見解を示してきた。南北朝時代は史料に乏しく検証もままならないが、当時の武士や僧侶、修験者たちは縦横無尽に日本を駆け巡り、各地方にわずかながらも史料や伝承を残した。その一部である、岩手の「桂泉鐘の銘」と福岡の『五条家文書』に関連がみられたように、各地方の史料を総合的に捉えることで新たな見解を展開できる可能性を感じられた。

協力機関（敬称略）

八葉山天台寺
二戸市立浄法寺歴史民俗資料館
岩手県立図書館

註

1　草間俊一「天台寺元中九年の鐘銘をめぐっての問題」(『岩手史学研究』第五十五号　岩手史学会　一九七〇)

2　岩手県立博物館編『天台寺』(岩手県立博物館　一九八七)一〇六頁より引用

3　小笠原伊八「黒森神社と長慶天皇の御陵　附土佐坊道尊傳　日詰町木村家の傳説」(『黒森顯彰會報』第三号　黒森顯彰会　一九三一)三頁より引用

4　角田寿桂『桂泉天台寺縁起』(『機関誌　浄法寺』浄法寺町文化懇談会　一九七六)九頁より引用

5　前掲4　角田氏論考　九～一〇頁より引用

6　佐々木京一『三上氏系譜』太平記から明治まで」(『'92不思議の国いわいずみふるさとノート』岩泉民間伝承研究会　一九九二)一六二頁より引用

7　大矢邦宣「天台寺長胴太鼓の銘文をめぐって」(『岩手県立博物館研究報告』第九号　一九九一)

8　続群書類従完成会『群書解題』第四巻下系譜部第四・伝部第二(続群書類従完成会　一九六七)一六二頁より引用

9　荻須純道『正法山六祖伝訓註』(思文閣出版　一九七九)二八頁より引用

10　大光山聖壽寺『大光山聖壽萬年禅寺縁起』「聖壽寺歴代過去帳」(光陽美術　二〇一四)二八頁より引用

11　前掲6　佐々木氏論考　一七九頁より引用

12　『南部史談会誌』第三～二十一号(南部史談会　一九三三～一九三五)にて太田代恒徳氏、小笠原謙吉氏、七戸吉三氏らによって論争が繰り広げられた。

13　『奥南旧指録』は、写本のみ伝わり誤字脱字が散見する。「義山明恩」の山と明が、「崩」の一字に誤写されている。訂正して記載した。

14　前掲4　角田氏論考　一〇頁より引用

15　辻善之助　編『大乗院寺社雑事記』第十二巻(三教書院　一九三七)二九六頁より引用

16　前掲4　角田氏論考　九～一〇頁より引用

17　赤塚白水『桂泉観音史蹟考』(『天台寺特集　機関誌　「浄法寺」』第三号　浄法寺町文化懇談会　一九七九)一六四頁より引用

18　小田島升太朗『桂泉観音記』(一九一五)二八頁より引用

19　赤塚白水・千葉紫雲『桂清水案内記』(天台寺桂寿院　一九一八)一八頁より引用

20　前掲19　赤塚白水・千葉紫雲氏論考　「緒言」を一部要約した。

21　村田正志・黒川高明　校訂『史料編纂(古文書編)五条家文書』(続群書類従完成会　一九七五)二六頁より引用

22　村田正志「南朝関係　五条家文書の研究」(『国士舘大学人文学会紀要』第一号　国士舘大学文学部人文学会　一九六九)七四頁を参考にした。

23　外池昇「長慶天皇陵と「擬陵」ー臨時陵墓調査委員会による「調査」「審議」から宮

内大臣と総理大臣・枢密院議長の「会見」までー」（『日本常民文化紀要』第三十二輯　二〇一七）を参考にした。

24　高野山霊宝館『霊宝館だより』第百十二号（公益財団法人高野山文化財保存会　二〇一四）一〇頁より引用

25　兵頭裕己『太平記〈よみ〉の可能性』（講談社　一九九五）を参考にした。

（よつや・えり／岩手県立博物館　〒〇二〇-〇一〇二　盛岡市上田字松屋敷三四）

要旨

南北朝時代の南朝第三代長慶天皇には東北下向の伝承がある。その舞台のひとつ、岩手県二戸市浄法寺町の天台寺には、「桂泉鐘の銘」と呼ばれる元中九年の鐘の銘文が伝わる。それは解読されてこなかったが、関係人物の事蹟や当時の時代背景、天台寺の寺伝等を鑑みて読み直してみたところ、長慶天皇の死去を伝えた内容と思われ、南北朝時代終焉に関わる可能性がでてきた。また、長慶天皇の没年も通説より三年早まると考えられる。

キーワード　長慶天皇、南部守行、道尊、脇屋義治、南北朝合一